| 2024年度採択大学 | |
|---|---|
| 大阪大学 | **課題・背景**<br>・昨今の競争的資金獲得のためには研究の社会的意義を明確なシナリオで申請書に記述する必要があるが、その執筆は基礎研究者にとって大きな負担となる場合がある。<br>・研究者間の横方向のつながりが必ずしも十分とはいえず、そのことが学際的研究の推進を難しくしていた。<br>**課題に応じた寄付金の活用策**<br>・「若手研究者間の学際的な研究を促進するブレインストーミング（若手ブレスト会）」の開催と、そこから生まれたフィージビリティ・スタディに対し、学内グラントによる支援を行う。<br>・社会課題と大学の研究シーズを両方理解し、それらを的確に結びつける「シナリオ言語化のプロ」としての研究マネジメント人材の育成にも並行して取り組む。 |
| 静岡大学 | **課題・背景**<br>・若手研究者間の連携強化を目的に「プロジェクト研究所長育成プログラム」を2023年に実施し、交流会や研究助成を行った結果、若手研究者の交流が活性化し、初のプロジェクト研究所の設立にもつながった。<br>・一方、さらにステップアップした提案に必須な、チームビルディングや学際研究への展開が課題となった。<br>**課題に応じた寄付金の活用策**<br>・学際研究につながる「プロジェクト研究所長育成“加速化”プログラム」を実施し、分野横断型の交流会の拡大実施や研究助成、URA主導の研究チームの組成、研修会などを行う。<br>・「育成型」「本格型」フェーズに応じた支援を強化し、将来的な学際型プロジェクト研究所の設立を目指す。 |
| 東京理科大学 | **課題・背景**<br>・既存の学内の若手研究者支援の仕組みはあったが、成果の見込みが立ちやすいテーマを持つ一部の若手研究者にしか支援が届いていなかった。<br>・横断的研究を促進する組織を持ち、特色あるテーマでの基礎研究を推進しているが、若手自らが分野融合研究を企画・主導するハードルは高い。<br>**課題に応じた寄付金の活用策**<br>・フォーカスする6つの研究領域について若手研究者による融合研究プロジェクトの提案を受け付け、採択者に研究費を配分する。各領域のベテラン研究者も交えた審査を行う。<br>・プロジェクトの成果を効果的に上げるため、各採択研究者へのURAによるメンタリングや伴走などを併せて行う。 |
| 山梨大学 | **課題・背景**<br>・若手研究者の研究企画力が伸び悩んでおり、一因として、世界的な動向や自身の研究の国際的な位置づけを十分に分析できていないことが考えられる。<br>・若手研究者は日々の業務に追われ、海外機関と接点をもつ機会を活かしきれていない。<br>**課題に応じた寄付金の活用策**<br>・若手・次世代研究者が海外に渡航し、海外研究者とともに調査・実験・議論等を行うことを支援する。<br>・研究者が海外出張に行きやすい環境を整えるために、ニーズに応じて業務代行者や支援者をマッチングし、出張中の教務等を代行する制度である“人材バンク”を新設する。<br>・URA が大学全体の研究力向上の戦略・体制・方法等を見直すために海外ベンチマーク大学の研究支援体制や方法を調査し、本学のシステムに取り入れる。 |
| 信州大学 | **課題・背景**<br>・地域の大学として、研究テーマも地域課題ベースで設定されることが多いが、抜本的な課題解決や社会実装に向けては、複数の研究者の参画による分野横断的なアプローチが必要。<br>・次世代研究者に対しては、十分な研究支援の機会を提供できていなかった。<br>・学内では、大学運営や社会課題解決の戦略実現にURAが主体的に関与する体制が既に出来ている。<br>**課題に応じた寄付金の活用策**<br>・寄付金を活用して、URAが研究プロジェクトを企画して、異分野融合による研究力の向上・地域課題の解決を両立する研究課題を実施する。<br>・URAによる研究プロデュースに必要な調査、ワークショップなどを企画・実行するとともに、次世代研究者の巻き込みを進める。 |